

# 八幡のジレンマ

みるみるみるとん

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

雨の中突然出会った彼女。

時がたつ度になぜか話が噛み合わなくなっていく。

そんな時、彼女の身に起こっていた衝撃の出来事!!

二話	一話
5	1

目次

## 一話

最近ずっと雨が降っている。

しとしとと地面の渴きを癒すように、雨が降り続いていた。街行く人々は当然のように傘をさし、天からの雫を浴びまいと最新の注意を払っていた。

「こりや止みそうにねーな」

夕飯の買い物を終え、ただただ降り注ぐ雨に嫌気が差しながらも一歩ずつ自宅へと歩みを進めた。

傘はさしているものの足元はびちよびちよでちよつとばかりうんざりしている。

今日小降りって言ってたじゃん!!

そんなどうでもいいことに突っ込みを入れながら駅のホームに向かう途中、後ろからカツカツとヒールの音をたてながら傘もささずに走り去る女の子を見つけた。

本来ここで転げるか荷物を落とし、それを俺が華麗に拾い上げ、傘をスツと渡すのがラノベの主人公なのだろうが、俺はそんな事はしない。ていうかまずなかなか転けてくれないんだよな。

そして、俺がハーレム主人公になることを夢に見ながら一人妄想に浸っていると

ガサツ

と、荷物が落ちる音がした。

えっ?!まじ!?

傘代わりにしていた鞆から荷物を落としたりらしい。彼女の周辺には様々なものが飛散し、追い討ちをかけるかの如く雨が空から降り注いでいた。

ちっ!仕方ねーな!

若干のニヤケを抑えながらも彼女を助けるべく彼女の元へと向かう。

「大丈夫ですか？」

まるで王子様のような立ち振舞いで彼女を傘で覆い、落ちた荷物を拾い上げる。

あれ？俺、かっこよくね？

「ありがとうございます。」

彼女はにこりとこちらに笑みを浮かべ、落ちた荷物の雨粒を降り落としていた。

あつ！そうだ。

俺は、鞆に入っていたタオルを取りだし彼女に手渡す。

「あの、これ、よかったら」

「すみません」

彼女は軽く会釈をしてタオルを手に取り、濡れた髪の毛の水滴を拭う。

俺は予備のタオルで飛散した荷物の水気をとり、彼女の鞆に入れていった。そして、最後のキーホルダーらしきものを手に取ろうとした時、

「待ってください！」

彼女は少し大きな声を出した。

「すみません。」

まあ、そうだよな。よくよく考えたら女の子の私物を触ってるわけだし、嫌がるのも無理ない。

俺は、手を引っ込め、少し後退りをする。

「い、いえ、そういう訳では」

彼女は申し訳なさそうにうつむいた。

俺は、どうすればいいのか分からずなぜか名前を聞いてしまった。

「あの、お名前を聞いてもいいですか？」

彼女は少し困惑した様子ではあったが、

「雪ノ下、雪ノ下雪乃です」

彼女は丁寧そう答えた。

「ところであなたは？」

将来のハーレムの一角のなるであろう雪ノ下さんのことを考えて

いたことで自らの名を名乗ることを忘れてしまっていた。

「比企谷 八幡です」

ちよつとかつこよく言おうと思ひ、張り切りすぎてしまった。」

彼女は刹那驚いた風に見えたが、すぐさまとても悲しそうな表情を浮かべ、左手にあるブレスレットを握りしめていた。

そんなに変な名前？まあ、確にかつこよくはないけど、こればかりはどうしようもない。

「ご、ごめんなさい！」

彼女は、そう言い放つと立ち上がり駅のホームへと向かった。なんでフラれたの？ハーレム計画は？

まあ、大体結婚式何てのも『出会いは最悪で』が常套句で始まるものが大概だしな。

「帰るか」

よくわからん人ではあったが人助けができたのは八幡的にポイント高い。

あと、ハーレム計画とかよくよく考えたらだるいわ、やめよ。

雨は相変わらず降り続いてはいたが、フラれた俺の心を癒すようにやや小降りになっていた。

「今ごろかよ」

そんなことを呟きながら自宅へと帰っていった。

「だいたいまー」

「おかえり、お兄ちゃん！」

なんだかんだ言つて家が一番落ち着くんだよな。慣れた環境が一番楽だ。大学デビューで金髪にしてそわそわ辺りを警戒しながらびくついているような緊張感が外にはある。

「お兄ちゃんどうしたの？びしょびしょだよ」

そういえば、服が濡れていたのを思い出した。やべーさみー。

「いや、ちよつと。色々あつてな」

「ふーん。まあ、どうでもいいけど、さつさと風呂に入つてね。あと、顔がきもい。」

「え?」

「どうやらニヤケてしまつていたらしい。」

「きもい? ひどくね?」

「まあ、とりあえず風呂にでも入るか。」

濡れたジャージを洗濯機に放り込み、小町が沸かした風呂に入る。

「ふうー。」

芯まで冷えきつていたため少し熱めの湯が体全体に染み渡る。

辺りとの気温差で湯気が立ち込め、湯船一面が真っ白となった。一人は楽でいいな。そんなことを思い浮かべていた。

ふと、今日の彼女のことを思い浮かべる。彼女は別れ際に悲しそうな表情をしたが、あの相貌は俺に対する嫌悪ではない。ならばなぜ? それにあのブレスレットをなぜ彼女が持っているのだろうか。たまたまか?

考えていてもわからないことはわからない。それに十年以上前の物とはいえ、別の人が持つていてもおかしくはない。

きりがないことくらい分かつていた。けれどなぜか大切なことのような気がしてならないのだ。目を閉じてもその答えにたどり着くことはできず、濃い靄が立ち込めたまま辺りの視界を遮断している。

思い違いであつて欲しい。ただそう願いを込め、目の前の水面を見つめていた。

## 二話

傘を忘れてしまった自分が憎い。

服は雨で濡れてしまった。けれど、天気予報では小降りになってい  
たはず。仕方ない。

あともう少しで駅のホームだわ、あと少し。

ガサツ

鞆から荷物が落ちてしまった。辺りには無惨にも散った私の私物  
が散乱している。最悪。たださええ雨で心が沈んでいたのに。

誰も私に手を差し伸べようとはしない。分かっていたわ、誰も助け  
てはくれないの。今も、これからも。

「大丈夫ですか？」

突然後ろから声がしたわ。

そして、彼は躊躇することなく濡れた私の体を覆い隠すように傘を  
さしてくれた。王子様のように思えたわ。とても嬉しかった。

「ありがとうございます」

また、彼はタオルまで貸してくれたの。ありがとう。心の底から感  
謝をしたわ。

私を雨から守ろうとしてくれていたからなのか、彼の服が濡れてい  
た。早くしなくては、そう思い、急いで荷物を鞆に入れていく。

最後のひとつのキーホルダー。これは私の宝物。帰ってきちんと  
拭いてあげようと思った。

けれど、彼が先にそのキーホルダーに手を伸ばしたの。

「待ってください」

思わず声を上げてしまった。彼が悪いわけでは決してないの。

ただそのキーホルダーだけは私にとっては大切な物だから。

「すみません。」

謝るのは私の方なのに。

助けてくれた相手に声を上げるなんて私は恩知らずだわ

「い、いえ、そう言う訳では」

気まづくなりうつむいてしまった。



「あの、お名前を聞いてもいいですか？」

ふいに名前を尋ねられたわ。そうよね、まずは自己紹介をしなくては。

「雪ノ下、雪ノ下雪乃です」

なんとか嘸まずに言えたわ。少し緊張した。

そうだわ、彼の名前を知りたい。私の命の恩人だもの。だから、笑顔で彼の名前を聞いてみることにしたの。

けれど、それが間違いだったみたい。

「ところで、あなた？」

彼は落ち着いた様子で

「比企谷 八幡です」

そう答えたの。

驚きと焦燥で頭がおかしくなりそうになったわ。なぜ彼が？

私の今の感情を何て表現すればいいのか正確にはわからないの。言葉では言い表せないような思いが体中を巡ったわ。

これが言葉の貧しさね。

そして、なぜだか私はとても悲しい気持ちになったの。ダメ。ここに居ては。

本能がそう囁いた気がしたの。私は居てもたつてもいられなくなったわ。だから、その場から逃げ出してしまったの。

「ご、ごめんなさい」

感謝をせずに謝ったわ。けれど、そうすることしか為す術がなかったの。

駅のホームまで必死に走ったわ。周りのことも気にせずに、なりふり構わず走ったの。

それから、自分にはあまり体力が無いことに気づいたわ。私、体力だけには自信がないの。心臓が飛び出そうなほど鼓動しているわ。

少し、疲れた。

それから、近くのカフェに入ったの。心を落ち着かせる為よ。

「コーヒーを下さい」

近くのカウンターに腰をかけたわ。

温かいコーヒーが喉の渴きを癒してくれる。

少しだけ正気を取り戻したわ。あれだけのことで動揺するなんて、自分が情けなかった。

『比企谷 八幡です』

「聞き間違い、、、では、無かったのよね」

コーヒーカップを持つ手に思わず力が入る。

彼に会えた時はとても、嬉しかったの。

そうだわ、今度彼に会ったら、はじめに、ありがとうが言いたいわ。そして、一緒に色んなお店に行くの。それから、、、。

そこまで考えて、この願いが叶わぬ夢であることに気づいたの。本当のことを言うと叶わないわけではないの。けれど、いずれすべてが消えてしまう。

だから、私は諦めることを選ぶわ。得ないことより、失うことの方が辛いことだってあるの。

私はあの時のことを後悔はしていないわ。これからもずっと、あなたとは会わずに生きて行くの。大丈夫、きっと、大丈夫。

自分にそう言い聞かせ、手の中にあるキーホルダーをそっと握りしめた。

私には、彼と関われない理由があるの。

すべてを失わない為に私は得ないことを選択する。

タイマーの音で目が覚めた。時計は午前七時半をさしていた。

「もう、そんな時間か」

俺は全く待ち望んではいないが、今日は世間で言うところの入学式

である。中学では、一人寂しく息を潜んでいた俺にも暖かい春がやって来た。両親が仕事ということもあつてか、入学式という晴れ晴れしい式典にも関わらずなぜか一人で迎えこととなつてしまい、すでに朝から不安だらけである。

小町の時は意地でも仕事を休むくせに俺となれば話は別だ。

まあ、小学生の時とかは、親に来て欲しいものだが、高校生という多感な時期になるとそうともいかない。

それに、俺の場合は友達ができないので一人寂しく忍者のように息を潜めている息子の生態を親に観察されるのはごめんだ。あれ？結局、暖かくなかぬ？

そんなこんなで今日は入学式だ。この年ともなれば入学式ごときで、はしゃぐ俺ではないが少しだけは期待をしておこう。少しだけね。